

『ある愛の寓話』

～ 村山作品の新たな出発点 ～

村山 由佳

今回のオススメ本は、純愛物語から官能文学まで、“恋愛小説の名手”、村山由佳さんが、デビュー30周年を意識して書かれた短編集です。

『星々の舟』で第129回直木三十五賞受賞、『ダブル・ファンタジー』で第4回中央公論文芸賞、第16回島清恋愛文学賞、第22回柴田錬三郎賞を受賞するなど、村山さんの作品は高く評価されています。

先日、NHKのラジオ番組、「心を紡ぐコトバたち」に村山由佳さん、小池真理子さん、千早茜さんの3人の作家が出演しているのをたまたま聴く機会がありました。番組の内容は、お互いの作品に登場するコトバの使い方や表現の魅力をひもときながら、作家としての姿勢や、作品と人生との関係性を率直に語り合うという、大変興味深いものでした。

そのなかで、村山さんの小説のなかに出てくるコトバ、「猫は、一生に一度だけ、人間の言葉を喋るんです」に、猫好きの私は、とにかく心が動きました。読んでみるとそれは、オススメ本の3つ目の短編、『世界を取り戻す』のなかに出てきました。

『ある愛の寓話』に収められた6編に共通しているのは、愛の対象が人形や猫、犬、馬などで、人間ではないということです。それは一見、個々の特別な事情のようで、実は私たちの誰もが抱えているものなのかもしれません。

小説のなかの猫が一生に一度だけ口にしたコトバは、いったい何だったのか、見つけると、ひとりの女性の生き方に優しく触れることができます。

